



境界あれこれ

13

～ 子どもの世界への境界侵犯 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

<はじめに>

ここ10年程、いや、もっと前からかと思うが、大人の世界と子どもの世界の境界があまりにも曖昧になり、子どもたちの世界に大人が入り込み過ぎたり、或いは大人の世界に子どもを引きずり込んだりという様相に、どうやって子どもの世界を守るべきかと言うことに悩んできた。そこで、今回はその点について、筆者自身が仕事を通じて感じてきたそうした思いをまとめてみたい。

<大人が子どもなのか？>

境界について書き始めて間もなく、大人と子どもの境界について書いた（境界あれこれ 3）。そこでは、どこに境界をひくのか、外国における例も交えて意見を書いた。そして最後のまとめとして以下のように書いた。

『子どもっぽい大人』『大人っぽい子ども』などの表現もあるように、大人であっても子どもっぽいところがあるし、子どもも妙に大人びることもある。その時々でも様々な表情を見せ、行動上もばらつくのが「人」である。大人と子どもの境

界をはっきり分けることは個体差も大きく、結局できないのかもしれない。しかし、せめて子どもたちに対しては、子どもであることを守ってあげたいと思う。

世界全体がスピーディーになり、情報過多の中で、子どもたちが大人の世界に巻き込まれ、大人と子どもの境界がより曖昧になって、子どもの時代を早く終えさせられているように感じている。

子どもでいられる時間は短い。その時間をしっかり保障してあげることで、子どもは大人になることを望み、成長していこう。大人が大人らしく、子どもの見本となるように生きていくことが、大人と子どもの境界をはっきりさせていくことに繋がるのではないかと改めて思った。」

今読み返してみても「大人がおとならしく、子どもの見本となるように生きる」ことが難しい時代なのではと思う。

大人としての責任を重んじるように育てられてこなかった大人たち。成人式を見ている、本当に大人としての自覚を持っているのだろうかと思うような振る舞いが報道される。

SNSでの受け狙いの投稿。アルバイトのどんなでもない行動や、迷惑行為としか言えないような行為を、面白おかしくネットにあげ、炎上するのを狙っている。そうしたことでしか、自分を認められない、認められていると思えない、まるで、1歳児が褒められて同じ行動を繰り返すのと大差ない。

目立つこと、世間を驚かすことにばかり、夢中になって、色々なことを思いつく。その発想を違う形に使えるらどれだけ社会に貢献できるだろうか？

前述のような受け狙いの投稿の結果、アルバイトをくびになるばかりではなく、店への損害賠償や罰金といった責任の取らせられ方に対し、結局親たちが代わりに支払っている。若気の至りなどという問題ではない。ちょっと考えれば、どういう結果になるかわかるはずなのに、目立つこと、受けること、面白いことといった快樂追及に終始

し、単純で浅薄としか言いようがない行動を制御することが出来ない。

こんな行動については、YouTube、Twitter、Facebookなど、動画をアップできない世界であったなら、起こらなかったのではないか。

<時代の違い>

ちょっと前の大人はもう少し成熟していたと思う。別に昔はよかったというつもりは無いし、必ずしも昔が良かったとも思っていない。ただ、大人とは社会的規範を理解し、自らの行動に責任を持って、よく考え、その結果起こりうる問題を十分に検討し、一つ一つの行動を制御することが出来ると思っていた。もちろん、気の緩み、過ちが無いわけではないし、子どもたちの模範となれない大人たちの行動も無いわけではない。すべての大人が品行方正、清廉潔白であるとは言わない。犯罪者もいれば、迷惑行為など、問題を起こしている人もいるだろう。しかし、全般的にというか、社会全体の動きがもう少しゆっくりで、落ち着いていたのではと思う。

あっという間に情報が流れ、拡散する今の時代とは、明らかにスピードが違うし、情報量も違う。その影響か、人々が落ち着かない。大人も子どもも常に時間に追われているような感覚になる。テレビも無かった時代、テレビが出来て流行ってきた時代、パソコンが普及して、携帯電話が出来て、スマホやタブレットの時代になってと、科学の発達とともに便利になり、その恩恵にあずかっているのは分かるし、そのこと自体は喜ばしい。ただその速さについて行きそびれている気がするし、その文明の利器の使い方についても後出しになっている。文明の利器をどう使うか、そこにモラルや知恵や自己コントロールと言った力が必要ではないか。

ゲームの実況中継や、画像トリックを使った面白い画像、その他、たまたま撮れた珍しい画像な

どは、もちろん見ていて楽しいし、子どもたちにもあまり害もない。しかし、中には子どもたちが見ることを考えると、とても良い大人の見本とは言えないものも多々ある。そうした、子どもに見せたくない動画をあげた人たちは、一部は未成年で、子どもと同等なので仕方がない部分もあるが、大人がやっているものもあるのが問題である。情報網の中でもモラルを守り、自己コントロールを出来ることが、大人であろう。そして、それが出来るからこそ大人が、子どもとの間の境界を意識し、「大人の時間」「大人の世界」に間違っても子どもが入り込まないように、注意することが出来る。

<子どもの世界への境界侵犯>

テレビで連日伝えられる様々な情報番組を、子どもたちが大人と一緒に見ている。或いはネットで見ている。子どもたちはまだ知らなくても良い事まで知ってしまう。情報だけではなく、物質的にも、服、髪型、マニキュア、化粧など、子どもたちが普通に大人と同じ様にできる。更に、最近では、小学生でも美容整形手術をするケースが見られるようになった。中高生がアイプチをしていたところが懐かしくさえ思える。見た目ばかりに捉われるために、醜形恐怖の子どもも増え、結局整形しないと学校に行けないと言われると、保護者もつい手術を認めてしまうようである。子どもにとって何が大事か、内面をいかに磨くか、大人が見せるべき見本とは何か、そして境界をどこに引くか、大人側からの境界侵犯がないか、今一度考えねばならない。

夜遅くまで、子どもを連れまわし、居酒屋で過ごさせる保護者もいる。生まれて間もない赤ちゃんを連れて、買い物や温泉に行く保護者もいる。子どもを車の中に置き去りにしてパチンコをしている保護者もいる。もちろん虐待している保護者もいる。そこまで酷い話ではなくても、子ども

に対して、大人に対すると同じような要求を出し、結果を求める保護者もいる。

子どもをゲームの世界に誘い、勉強をしようとしても邪魔をし、子どもに甘え、依存しているような保護者もいる。子ども同士の世界に割って入って、子どもの友達とずっと話している保護者がいる。どっちが大人だかわからない親子に出会う。相手が高校生以上ならともかく、小学生の子どもと同等、いや、下手をするとそれ以下のような甘え方をされては、子どもが無理をして大人ぶるしかないだろう。こうして、大人の世界に無理やり引き込まれる子どもが、少しずつ増えているように感じている。

大人と子どもの境界を、今は誰も意識していないのではとさえ思える。

<保護者として大人としてあるべき姿>

先日、40歳過ぎの男性で、妻子もあり、働いているにもかかわらず、様々な書類を書くことが出来ず、手続きができない方がいた。発達の問題があってというならわかるが、結婚するまでその方の母親が、代わりにすべてをやってきていたのである。その結果、奥さんは、全ての書類記入や手続きをやっていた。DVもあって、やらないと切れるからやらざるを得ない状況だったのである。小さい子どもを抱えながら、家事と育児に加えて、会社に出す始末書まで奥さんが書いていた。あきれた話である。その男性の母親は父親と上手く行かず、一人息子に執着したともいえる。これでは息子の自立には繋がらない。

世の中では、会社に勤めても、ちょっと上司に叱責されたらもう登社できないとか、ちょっとミスをしたらもう無理、などと、そこで堪え忍ぶことも無く、保護者に泣きついて、保護者から会社に電話が入り、休ませますとか辞めさせますなどと言って来るという話も増えている。保護者に頼めない場合は、退職代行サービスに依頼する。常

に良い子であろうとする子どもたち、空気を読み過ぎて動けなくなる子どもたちを作っているのは保護者や大人たちである。その子どもたちが大人として社会に出ても、自らで責任を取ることが出来なかったり、自殺など極端な責任の取り方をしてしまうのも、保護者や大人たちが子どもたちに何を求め、どうかかわってきたかに大きく影響されていると思う。

保護者とは、大人とは、子どもたちの安心と安全を守り、生活を保障し、教育を受けさせ、大人としてのモデルを見せるべきものであろう。社会人として生活する際の規範を伝えるべき先達である。

そして、子どもたちが、短い子ども時代を楽しんだり、喜んだり、怒ったり、悲しんだり、我慢したり、耐えたりしながら、仲間を作ったり、1人になったり、傷ついたり、失敗したり、成功したり、自信を得たり、自信を無くしたりという日々を送るのを、黙って見守ったり、慰めたり、たしなめたり、時には背中を押したり、導いたりしながらその成長をともに歩むのが保護者であり大人である。

母子の関係で言えば、子どもが生まれたとき、赤ちゃんは母親と一体化していて、その後、分離固体化という時期を経て、別個体として成長していく。母親は、親という立場、大人という立場で、子どもを守ると同時に、子どもが大人との境界を超えないように注意する。子どもの時は、母親は直ぐ近くにいて、最初は抱っこし、次に手をつなぎ、常にそばにいる。その後、子どもの成長と共に、母親との距離は、徐々に離れていく。並走しながらも、母親と子の間には、しっかりとした境界があり、そこを保ちながら、子どもが独り立ちしていくのを見送る。それが母親の宿命である。寂しいからと引き留めてもいけないし、あまりに早くにつき放してもいけない。境界を大事にしつつ、子どもの成長を見守り、関係性の中で、徐々にその境界が薄れ、実際の年齢からも発達状況からも、ほぼ同等の関係性になれる時期が来たら、大人と子どもの境界はなくなり、親子の境界として存在し続ける。その様な境界の在り方を意識できれば、子どもたちは子どもの時代を守られるのではないか。